



TITLE:

学生の声

AUTHOR(S):

---

CITATION:

学生の声. Cue 2003, 11: 54-54

ISSUE DATE:

2003-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/57852>

RIGHT:

## 学生の声

### 「博士進学への過程と現状」

工学研究科 電気工学専攻 荒木研究室 博士後期課程1回生 沢 口 義 人

思い起こせば10年前、中学生の頃に、「世界を変える」などという大それた言葉に取り憑かれ、他人の意向を気にせずに進めることが出来、そのくせ世の中への影響力が非常に強そうな、工学の分野に目が向きました。当時から人と同じ道を歩くことが嫌いだった為か、普通高校には興味が湧かず、近所の高等専門学校へと進学しました。その後、京大への編入試験や大学院入試を運良くくぐり抜け、さらに博士後期課程へ進学し、現在に至っています。

道中、様々な本を読み、色々な考えに触れるうちに、最初に述べた事柄の内、工学の世の中への影響力の強さへの確信は深まりつつも、他人の意向を気にせず…という点は幻想であったと気づき、さらに「世界」なるものが、それほど単純なものではないと分かってきました。その意味では、最初に工学を志した原点からは外れてきたように思います。しかし、自分のテーマとして選んだ医療システム工学への興味や、高等教育機関における研究のあり方への関心などが加わり、徐々に軌道を修正しつつもここまでやって来ました。

修士課程ではまだ、同輩の状況を見ながら進めて行くことが出来たのですが、博士課程に進んでからは、これまで身近に博士課程の人がいなかったこともあり、私自身がどういう生活を送ればよいものか、少々不安です。また、自分の面倒すら見切れていないのに、学部生や修士学生の研究の面倒が見れるだろうか、などという危惧もあります。さらに、学びを進めるほどに分かっていないことが増えていく様子に、今さらながら焦りが募って来ました。しかしそれでもなお、今の自分の立場が得難いもので、しっかりと頑張れば意義深い結果が得られ、面白い展開になって行くだらうという予感があります。

未だ巨人の肩には乗れず、腰の辺りでつるつる滑っている気分ではありますが、やがて頭の上まで登り切り、新たな地平を見出す日を夢見て、今日もぼちぼち頑張ろうと思います。

### 「これまでの研究生活を振り返って」

工学研究科 電子工学専攻 松重研究室 博士後期課程1回生 一 井 崇

高校生の頃、化学の授業で「IBM」と書かれた写真を見せられ、「これは原子を並べて書いてある」と教えられ、非常に感動した記憶があります。当時、ナノテクノロジーに関する知識などは全くありませんでしたが、これはものすごいことだと感じました。月日は流れ、そういった感動もすっかり忘れ、学部4回生になって研究室をどこにしようか考えていた時、松重研究室の前でふと足が止まりました。そこには原子像や分子像が並んでおり、SPMという装置を知りました。高校生の頃の記憶がよみがえり、松重研にお世話になろうと決めました。

院試が終わり、卒業研究テーマ候補の中にSPMによる分子像観察というのがありました。しかし、分子像観察に取り組んでいる先輩に質問に行くと、「非常に大変だからやめた方がいい」と。情けないことに、やはり別のテーマにしようと考えました。しかし、先生から「分子像観察の研究をやってほしい」とのお言葉があり、そのテーマが卒業研究になりました。

先輩の言葉どおり、分子を見るということがいかに大変かというのを身をもって感じました。さらに、SPMそのものではなく、試料作製装置の原因不明の故障にも見舞われ、本当にやめたいと何度も思いました。

しかし、修士に進学し、それなりに結果も出始めてきました。相変わらずつらい日々のほうが圧倒的に多いのですが、苦労した分が自分の糧になっていることを少しずつ感じ始めました。M2になり、就職か進学かは非常に悩みましたが、ここまで学んできたものを中途半端で終わらせたくない、最後までやり遂げたいと考えるようになり、進学を決意しました。

そして現在、博士課程の学生として研究に取り組んでいます。相変わらずつらい日々のほうが多いです。でも結果が出たときの喜びを知っていれば、何とかがんばれます。今年は桂への移転もあります。おそらく始めは装置の立ち上げで苦労の連続でしょう。しかしそれらは必ず自分の糧になるだろうと確信しています。一步一步地面を踏みしめながらゆっくり進んでいきたいと思っています。